教育セミナー1
「エピソードで学ぶ 20 世紀の生命倫理」

演者：二瓶 真理子（松山大学経済学部 准教授）

生命科学研究や医療全般にかんする基本原則として、「生命医学倫理の 4 原則」というものが知られている。これは、1979 年にアメリカの 2 人の生命倫理学者ビーチャムとチルドレスが『生命医学倫理』のなかで提唱したものだ。「4原則」とは、以下のようなものである。

1．自律尊重（本人が自分の意志で選択したり行為したりする権利を尊重する）
2．善行（人びとに対し、幸福や利益をもたらすように行為する）
3．無危害（人びとに対し、害悪や危害をあたえてはならない）
4．正義（リスクや機会を公正に分配しなくてはならない）

これらの諸原則が求めることがら、そして生命科学や医療におけるその重要性は、誰にでも、ある程度直感的に了解可能ではある。逆にいえば、どれも敢えて原則として掲げるまでもない「当たり前」のこととも感じられるかもしれない。

しかし、これらの 4 原則が紡がれ提唱されることになった背景には、20 世紀以降の具体的な出来事やエピソードとそれへの反省がある。たとえば、アメリカの地方都市で起きていた非人道的な人体実験（タスキーギ事件）や、シカゴのとある病院での透析器の希少性にともなう命の選別への議論（神様委員会）などである。今回は、これらのエピソードを紹介しながら、20 世紀の生命倫理の成立の歴史を振り返ってみたい。これらの具体的な文脈のもとで見直されることで、いっけん、当たり前のことを述べた抽象的文言のようでもある諸原則の意義と役割が改めてみえてくるのではないだろうか。